



TITLE:

大戦後の地名考(一)

AUTHOR(S):

瀧川, 規一

CITATION:

瀧川, 規一. 大戦後の地名考(一). 地球 1933, 19(5): 400-406

ISSUE DATE:

1933-05-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184163>

RIGHT:

大戰後の地名考 (一)

瀧川 規 一

地名辭典を翻いて略概念を得るにしても歐洲

大戰後地名そのものが變つて居り隸屬する領國が變つて居り爲めに意外の失策をなすことがある。専門家には判りきつたことでも素人には容易く知り得ない都會村落がある。外國の小説新聞を讀む時往々當該の土地が何れの領土であるか或は大戦後今日まで如何な事情の下にあるか判明しないことがある。今茲に地名考として連載せんと欲する所以は筆者自らの參考に供せんと欲するだけであつて、地名辭典を編纂するのどのと云ふが如き大それた野心をもつためではない。煩を厭はず閲讀を賜はる讀者にして訂正の必要を認めらる時は遠慮なく叱正せられんことを冀ふのである。五十音順に配列したのは

後に參考する時の便を圖つただけである。

〔ア〕

アイランド (Aland 又は Aland)。フィンランド共和国に一部分屬するボスニア (Bothnia) 灣の入口にあり三百餘の島嶼岩礁より成り八十餘の島嶼を除いて他は悉く無人島である。アイランドと稱する島は群島中の最大なるものであつて長さ十八哩ある。群島の面積合計五百五十平方哩。マリハム (Mariehamn) はその首府である群島の住民は瑞典出身にして水夫漁民である。穀物家畜を産し獸肉獸皮魚類チーズ及びバターを輸出する。

群島は永年瑞典領であつたが一八〇九年これを露國に割讓し一八五六年アイランド協約に依

つて要塞築構を禁止することになった。然るに露國の協約違反によつて屢紛争を惹起し一九一八年に行はれた住民の一般投票の結果瑞典に復歸したが一九二一年に至り國際聯盟は群島を芬蘭に隸屬せしめることに決議した。全人口二萬七千である。

アールボルグ(Ålborg)。丁抹領ジアトランド(Jutland)にある海港市でありリーム・フィオルド(Ljrm Fjord)に面してゐる。商業の中心地であつて穀物魚類を輸出する。人口四萬二千餘。コーペンハーゲン(Copenhagen)からは海上百五十六哩である。

アバダン(Abadan)。波斯灣の入口附近であり、シャッテルアラブ(Shatt-el-Arab)河の東岸にある島である。英吉利斯波斯亞石油會社(Anglo-Persian Oil Co.)は島内に大規模の石油精製所を設け石油に連關する機械製造所貯藏所油槽その他の設備がある。斯業の勞働者のために建てられた家屋と共にこれ等の諸設備は可成

り大なる町をなしてゐる。精製所は一九〇九年の創設であり大戰當時英國政府は全島を獲得し埠頭を作り出荷の便宜を計り諸種の施設をなした。一九一九年に至つて全部英吉利斯波斯亞石油會社に返還した。爾來繁榮は日を逐うて増大してゐる。

アブヴィル(Abbeville)。ソム(Seine)河畔にある佛國の都會。アミアン(Amiens)から鐵道によつて北西二十八哩の距離であり英海峽と連絡がある。主要産業は服地絨氈麻製品及び砂糖である。造船所があり穀類の取引所がある。

一五一四年には佛王ルイ十二世が英王ヘンリ八世の妹メリと結婚式をこの地に舉げ一五二七年には英佛條約がこの地に於て締結された。ヴルフラン寺(S. Vulfran)があり正面は一部分十五世紀の建築物で美觀見るに足るものがある。

アボッツフォード(Abbotsford)。蘇格蘭の文豪サア・ウオータ・スコット(Sir Walter Scott)の邸宅。一八一二年より一八二四年に亘つて建築

完成し蘇國ツウイド(Tweed)河の右岸にあり文豪一家の墓所メルローズ僧院(Melrose Abbey)の西三哩の距離にある。現今は邸宅を博物館となし文豪の遺品を陳列してゐる。文豪はこの邸宅に臨終に至るまで住居した。一八三四年アボットフォード・クラブ(Abbotsford Club)が組織され文豪の著書に關連する歴史的研究所を刊行してゐる。大戰後米國人の訪客頗る増加した。環境の風景亦賞するに足るものがある。

アベオクタ(Abeokuta)。英領西アフリカのナイゼイリア(Nigeria)にありエグバ(Egba)地區の首府である。オーガン(Ogun)河畔にあつてラーゴス(Lagos)の北鐵道によつて六〇哩の距離に在る。都會とは云ふものの實際は都會と村落と併合したものであつて繞らずに土塙を以てし廣大なる地域を占めて居る。

一九一四年に裁判所政廳及び水道が初めて設けられた。棕櫚油、護謨、木材その他地方特産品を賣買し商業中心地として活氣を呈してゐる。

歐洲製品も亦此處に市場を見出してゐる。

アベレイヴオン(Aberavon)。英國ウエールス地方グラモルガンシア(Glamorganshire)にあり、一九二一年以來市場の開ける小都會である。タルボット港(Port Talbot)の區内に屬してゐる。

アバブロッツク(Aberbrothock)。蘇格蘭の海港アーブロス(Arbroath)の古名。

アバカーン(Abercarn)。英蘭モンマスシア(Monmouthshire)にある都會。及びその附近も亦この名稱をもつて呼ばれて居る。グレート・ウエスターン鐵道(G. W. R.)の沿線にあつてニユポート(Newport)の西北十哩の處にある。炭坑があり鐵工場、鋳力工場及び化學藥品の工場がある。毎土曜日に市場が開かる。人口二萬餘。

アバコーン(Abercorn)。英領南アフリカの北ローデシア(Rhodesia)にある殖民地である。タンガナイカ湖(Lake Tanganyika)の東南十哩餘にあり、スチヴンソン街道(Stevenson Road)

によつてこの湖水とナイアサ(Nyasa)湖とに連絡されて居る。

一八八九年に初めて殖民地を設けられ附近の諸種族と貿易を盛に行つて居る。一九一八年十一月四日にはこの地に於てフォン・レット・フォールベック(Von Lettow Vorbeck)の率ゆる獨逸軍が降服した。

南ローデシアにある鑛業區兼殖民地も亦同名を有してゐる。

アバデア(Aberdare) ウェールスのグラモルガンシアにある開市場及びその附近の地。西部鐵道(G. W. R.)の沿線にありてマーサ・チッドフィル(Merthyr-Tydfil)の西南四哩にある。石炭鑛があり煉瓦工場があり酒類醸造所がある。採鑛業の發達に伴つて非常な繁榮を來たした。附近にはブリトン族が殖民せし昔の遺物及び岩窟がある。

マーサ・チッドフィルは一選舉區であつてアバデアはその一分區をなし一名の代議士を選出す

る。開市日は土曜日である。人口五萬五千餘。

ヘンリ・オースチン・ブルース(Henry Austin Bruce 一八二五—一九五)は一八七三年に貴族に列せられこの地方の名稱をとりてバロン・アバデア(Baron Aberdare)と呼んだ。彼は一八五二年にマーサ區より選出され自由黨代議士となり一八六八年より七三年に亘つて内務大臣となつた。彼の孫シ・エヌ・ブルース(Hon. C. N. Bruce)は運動家として有名であつた。

アバチーン(Aberdeen) 蘇格蘭の大都會として第四位に位する北海(North Sea)の一つの灣に臨みデー河(Dee)とドン河(Don)の兩河口の中間に位置をとり鐵道によつてエディンバラ(Edinburgh)から北百三十哩半である。北蘇格蘭の主要なる海港でありアバチーンシアの主なる都會である。エル・エム・エス(L. M. S.)鐵道とエル・エヌ・イ(L. N. E.)鐵道の兩鐵道が通じてゐる。市は新舊の二つの部分より成立し、ドン河に向つて北に擴つてゐる市區は舊アバチーン

(Old Aberdeen)でありチー河の西及北にある部分
は新アバデーン(New Aberdeen)である。新
舊兩區は接續し市行政の爲めに共同の組織を作
つてゐる。舊アバデーンにはキングス・コレツヂ
(King's College)と稱する大學があり聖マカル
(S. Machar) 寺の伽藍の遺跡がありその内陣の
建物は現今教區の教會となつてゐる。新アバデ
ーンには多くの高壯なる公共建物がある。就中、
マリシャル・コレツヂ (Marischal College)をは
じめ大學附屬の建物、市及び郡附屬の建物、市
場、郵便局、及び診療所、商業會議所 (Trades
Hall) 宗教集會所 (Trinity Hall) ユニオン・コ
レヂ (Gordon College) 小學校 (Grammar Col-
lege) 及びヒズ・マヂュスチス・シアタ (His Ma-
jesty's Theatre) がある。新築の美術館があり大
學はマリシャル・コレツヂとキングス・コレツヂ
の兩大學が合併して總合大學を構成してゐる。
諸種の産業物中には漁業場があり魚肉製成場
がある。魚肉の製成せるものは全英中有名なも

のである。其他造船場、機械工場、化學藥品工場
花崗岩磨光工場、製紙工場等がある。海岸は市
にとつて重要な用途を有し廣大なる港を形成
してゐる。二千呎以上の長さをも有する棧橋があ
り造船場は八十五エーカー(十萬四千四十坪)の廣
さを有し埠頭は略二千呎に延びてゐる。港の入
口にはガーヅルネス・ライトハウス (Girdleness
Lighthouse) と稱する燈臺がある。

ゴルフ場があり公園がありそのうちにもダシ
公園(Duthie Park)は最大な公園であつて殆ど
五十エーカー(六萬一千二百坪)である。ラデオの
放送局があり B. D. と稱してゐる。國會には
二名の代議士を選出する。開市日は金曜日。人
口十五萬八千餘。

市は十二世紀に既に重要な地位を占め一
七九九年にウキリアム・ザ・ライオン (William The
Lion) から特許狀 (Charter) を得て居り、市民は
ロバート・ブルース (Robert Bruce 一二七四—
一三二九) に味方をしたので國王から廣大な土

地を下賜された。一三三六年にはエドウオド三世 (Edward III) の爲めに全市が焼かれ、内亂 (Civil War 一六四二—四九) 當時には王黨 (Royalists) 及び改革黨 (Covenanters) の兩黨の爲めに悩まされた。

アバチーニシア (Aberdeenshire)。蘇格蘭の東北の臨海郡。通俗にはマー (Mar) ストラスボギ (Strathbogie) ギアリオホ (Garich) フオルマルチン (Formartine) 及びバカン (Buchan) の五地方を含み一九七一方哩の面積がある。

海岸は突兀として岩礁多くあるが刻み目の如き凹凸は殆どない。全郡概して丘陵をなし西南部に於ては山岳となりグラムピアン (Grampian) 山脈がこの郡に延びてケアンゴルム (Cairngorm) 群山を形成しその最高峰はベン・マクチュイ (Ben Macdui) と稱し海拔四二九六呎である。主なる岩質は花崗岩と片麻岩であり花崗岩は建築材料として用ひられ砂岩も亦加工して使用されてゐる。ディー (Dee) 河は郡中の最大河で

あつて八七哩の長さであり、次にドン (Don) 河は八二哩、デヴァロン (Deveron) 河は六一哩、アイサン (Ythan) 河は三六哩である。これ等の諸川何れも鮭鱒を多量に産する。

丘陵地方は主として荒蕪地であり東北部及びドン河及びアイサン河の間に介在する地方は巧妙なる耕作法によつて地味豊饒であり燕麥及び大麥を主なる農産物としてゐる。

農業に次いで主要なる産業は漁業であり家畜飼養地としても優秀なる土地である。花崗岩の産出に關係を有する數種の工業があり、他方魚肉の調製、毛織物、木綿物、帆布、製紙等の製造業が盛に行はれてゐる。郡の首府としてアバディーン市があり漁業の中心地としてピーターヘッド (Peterhead) がありその他フレイズボロ (Fraserburgh)、ハントリ (Huntly) 及びインヴァリ (Inverurie) の町がある。アバディーンシア郡はキンカーディンシア (Kincardineshire) 郡と合して三名の代議士を選出する。バルモラル

城 (Balmoral Castle) は郡の西南部にあり、アバデーン市附近のバックスバーン (Bucksburn) にはローウェット・インスティテュート (Rowett Institute) と稱する動物性營養物研究所がある。全郡の人口三十一萬。

文學的關係に於ては詩人バイロン卿 (Lord Byron) は一七九〇年二歳の時母に連れられてアバデーン市のブロード・ストリート (Broad Street) に來り十一歳になるまで住んでゐた。

母は郡内のガイト (Gight) に住むゴルトン (Gorton) 家から出た人であつた。大學に關係を有した文學者ではジェームス・ビーチ (James Beattie) 一七三五一八〇三) と稱ぶ哲學者兼詩人が居りマリシャル・コレツチ (Marischal College) で教育を受けた。小説家トバイアス・スモレット (Tobias Smollett 一七二一—七一) は同大學の醫學博士であつた。郡出身の小説家にはウィリアム・アレキザンダ (William Alexander 一八二六—九四) が居り、デオーヂ・マクドナルド

(George MacDonald) が居る。

アバダフ (Aberdour)。蘇格蘭のファイフシア (Fifehire) 郡にある村、L・N・E 鐵道によつて十八哩でありエディンバラの西北に當りファース・オヴ・フォース (Firth of Forth) 河畔にあつて海水浴場である。アバダフ城 (Aberdour) の遺趾はモルトン (Morton) 子爵の舊居城であつた。人口三千餘。

新著紹介

○鑛物學概論

木下龜城 青山信雄共著 菊版横書三一

四頁 古今書院發行 昭和八年二月 定價二圓五〇錢

「鑛物學」の著者に依つて書かれた簡潔版である。幾何學的結晶學、物理的鑛物學、化學的鑛物學、鑛物の生成及び産出狀態、鑛物各論の五編に分たれ、卷末に一般索引の外に鑛物名(英)索引が附けられてある。挿圖三四二圖。初學者に比較的難解な結晶學、結晶光學は本文二九〇頁中約九〇頁を費して懇切に説明してあり、其他の物理性、化學性、生成産狀等の初學者に必要な常識を頗る簡潔に述べてある。最後の鑛物各論は全卷の過半部を占め重要な鑛物を網羅して各數行乃至數頁を費して要領良く記述されてある。我國に産する鑛物